



# 水辺の借りぐらし

エネルギー問題は昨今の地球が抱えている最も深刻な環境問題の一つである。急速な人口増加が都市化によるエネルギー需要の増加、それに伴い石油・石炭・天然ガスなど、天然資源の過剰採掘が利用されている。その結果、多くの森林が失地となり地球温暖化が進む。この問題を受け、近年では自然エネルギーを利用した発電が積極的に取り入れられつつある。しかし、そのためのエネルギーを利用した発電の普及は決して進まないうちの現状である。日本の発電状況に照らしても、天然資源に由来する発電が80%以上を占めており、自然エネルギーが普及しているとは言えない状況である。とりわけ日本は天然資源の自給率が10%前後とかなり低く、他国に比べて電力の価格高騰が避けられない状態である。そこで私たちは、自然エネルギーを最大限活用して住人ももちろん、地域の人々とも協力して建物内で生み出した電力のみで生活することが可能な未来のエネルギー循環住宅を提案する。

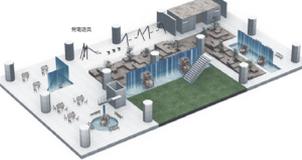
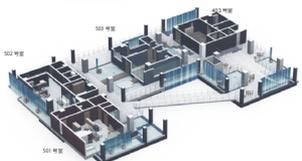
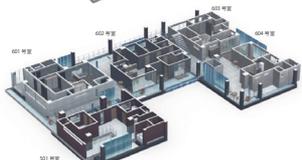


- 建物を流れる水のシステム
- 1. 屋上から1階に至るまでの場所でも30分の滝が流れている
- 2. それぞれの階は水路によってつながっており、最終的には1階の公園に集まる
- 3. 1階に落ちた水はポンプによって屋上へ戻り、建物を循環する

- 建物における水の役割
  - 1. 水車を発し発電するための動力
  - 2. 夏場建物の上昇の緩和
  - 3. 水のたまり、広場が形成される
- 建物内を水が流れる過程で水のたまる広場ができ、人々の交流の場所が生まれる  
多くの動物が生い残り、付近の自然が保たれ、生態系が形成される



- 発電器具
- 建物の1階は公園となっていて、地中の子供たちの遊び場や、その親たちの交流の場所として機能している。遊具は子供たちが遊ぶことによって発電され、建物の電力の一部として使用される。



603号室「解きの土工具」 住人：夫(50)、妻(48)  
陶芸家の夫婦2人が暮らす。目の前を滝が落ちるアトリエをそれぞれが有し、窓の掛け間によって水辺特有の湿度調整を行うことで高品質の作品が生まれる。プライベートとコミュニティが曖昧に連続する604号室で自身の子供の育成も行っている。



601号室「水辺のひざし」 住人：夫(68)、妻(67)  
老後のお年寄りの二人暮らしの住宅を設計した。復元からの動きが楽になるように復元を空間の中心に配置し、各部屋へと覗いている。また、西側に広くサランムを配置している。窓の高さを設えることによって、場所によって視線がわり、異なる水との関わり方が可能となっている。



502号室「ダイニングテラス」 住人：夫(27)、妻(28)  
西側の大きな窓を縦向きに配置し、その先にある庭が一つ一つ大きくつらぎ空間として機能する。リビングの窓の扉を開けると大きな半扉の空間として利用できる。夏場に西側の窓を開けると水を通したひやりとした涼しい風と共に、流水音と微かな水しぶきを感じられる空間が生まれる。



404号室「てらすとかけ」 住人：母(32)、子ども(8)  
母と子の2人暮らし。南面の大半を占めるテラスは風の溢れと涼しさで心地よい空間を演出している。別荘的な高層水辺を中心に配置されている自然光が柔らかく落ちる空間も快適であり小さな生き物も暮らしている。とけが好きな親子は定期的に入り浴している。



402号室「野郎の家」 住人：父(30)、母(30)、子ども(5)  
親子3人暮らしの住居。南面の中間階が様々なナチュラルエーションにおいて多種多様な表情をみせる。右のテラスにおける左側のテラスは深く設けることで太陽の変化をたのしみ、右側のテラスは太陽に加えて風が滝を揺らすことで生じる階間の動きをたのしむことができる。



303号室「Bahay Kubo」 住人：父(42)、母(40)、子ども(19, 16, 13, 10, 10, 4)  
フィリピンの外国人労働者と妻、親子6人が暮らす。邸名はフィリピン語で「涼しげな場所」という意味を持つ。外部との関係を生み出すキッチンや個室がないことでつくり出す大空間をうまく活用して涼しげな空間を構成する。



301号室「滝を透す家」 住人：祖父(60)、祖母(59)、父(38)、母(37)、子ども(13)  
LDKの中心と西側に滝が流れており、これらを通し、透せる設計となっている。また、南側に大きく土間を設けることで交流の空間や趣味の空間としても使うことができる。北西の個室には小上がりになっているスペースがあり、301号室の西側を流れている水路を一望できる。

604号室「解きの土工具」 住人：陶芸家の卵  
603号室の陶芸家に習う弟子たちが利用する場。内・外の境界が曖昧な空間で自分にあった環境を選び、作品に向き合うことができる。泊まり込みでの作業も可能になっている。人との距離を自在に感じたい創作を楽しむ空間である。



602号室「見ず知らず、水がたなく」 住人：ゲストハウス  
3人が宿泊できる無人のゲストハウス。それぞれの個室からは滝を望むことが可能になっている。数多あるゲストハウスから水辺を魅力的と感じて訪れた人々の間には既に価値観が生まれているのかもしれない。水が縁をつないでくれる空間となるだろう。



503号室「水が彩るアトリエ」 住人：夫(50)、妻(48)  
水彩画家の夫婦2人が暮らす。自身のアトリエかつ絵画教室でもあるこの住居空間は同等の大きさの水辺に面している。水辺によって自然光が柔らかく落ちる空間を展示した道沿いのギャラリーで芸術に触れた後、隣接するカフェで時を過ごすことが人気である。



501号室「水の縁色」 住人：祖父(62)、祖母(60)、父(35)、母(35)、子ども(8)  
3世代で暮らすメゾネット住戸である。南側には滝を望むために滝が流れる。水の迫力と力強さが感じられる。一方、2階北側のテラスには小規模な滝が流れており、水の美しさと心地よさが感じられる。愛おしい自然の表情を感じながら暮らしながら、人生に彩りを添えてもらう。



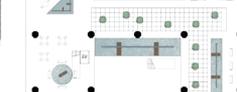
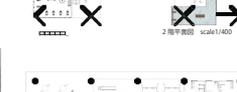
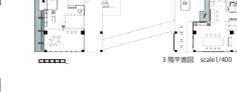
403号室「水出しコーヒー母と共に」 住人：父(39)、母(30)、子ども(11)  
403号室はメゾネット型になっており、4Fにはカフェ、5Fには住居の機能を持たせた。4Fのカフェは専業主婦の母が趣味の延長で始めたもので、共用下層に入り口を設けることで隠れ家カフェのような雰囲気を出している。



401号室「水辺のアトリエ」 住人：父(57)、母(55)、息子(31)  
水と広場を眺む隠れ家は、建築家の息子が愛するアトリエとして使用している。両親の住む母屋とは水路とテラスを介して視線がわり、互いの存在を確認できる。両親の個室には滝が流れ落ちてくるテラスがあり、水と緑の自然を感じ、日々の疲れから解放されるオアシスとして機能する。



302号室「水を囲む家」 住人：夫(35)、妻(34)  
中庭に落ちる滝を囲むように部屋が配置されている。滝との関係を生かし、ガラス張りの壁と屋外テラスを設けた。壁をあまり設けずに空間を仕切ることで、室内の距離感を軽減すると同時に、中庭の滝の存在を確立させ、水の流れを感じながらつらぐことのできる空間が生まれる。



# N00111 水辺の借りぐらし

井本 海希(岡山県立大学)  
小向 猛翔(岡山県立大学)  
谷岡 優希(岡山県立大学)